様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成　25　年　5　月　31　日現在

機関番号：３４５０４
研究種目：基盤研究（Ｃ）
研究期間：2010～2012
課題番号：２２５３０９３７
研究課題名（和文）高校教育改革に取り組む教師の改革対処型指導力の形成過程

研究課題名（英文）Teachers Diversified Copying with Education Reform in Senior High Schools

研究代表者
南本　長穂　　（MINAMIMOTO　OSAO）
関西学院大学・教職教育研究センター・教授
研究者番号：60108371

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、近年の教育改革の中で、高校及び高校教師がどのように取り組んでいるかを明らかにすることである。１つは、普通科と総合学科に焦点を合わせ、違った学科の高校生に調査を実施し、学習と生活の状況、及び学習観にみられる特徴を明らかにした。２つは、学科による生徒の学習や生活の状況、及び学習観に差異のみられる状況に、各高校の教師はどう対処し、学校や学科の違いに対応した指導能力の発揮の必要性について検討した。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this project is to clarify the problems on teachers copying with education reform in senior high schools. I administrated two kinds of questionnaire surveys. The first was given to students in “Sogo Gatsuka” and “Futu Gatsuka” senior high school. The second was given to teachers in four different courses of senior high school. Following findings were obtained. (1) There are many differences recognized in students’ view of learning and their learning attitudes between two courses. (2) It is necessary for senior high schools teachers to copy with students’ view of learning and their learning attitudes corresponding to courses of senior high school.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2010 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
2011 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2012 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：教育学、教育社会学
キーワード：高校教育改革、高校教師の指導力、高校長調査、総合学科高校、普通科高校、専門学科高校、小学科、高校生の学習観

１．研究開始当初の背景

1980 年代の臨時教育審議会答申以降、教育改革が急速に進んでいる。後期中等教育段階の高等学校の改革も急速に進行している。高等学校への進学率が 95%を超え、ほぼ全入時代に入り、また、少子化の進行のもと高校の統廃合も進んでいる。その中で、生徒の個性や能力に対応した高校教育の個性化・多様

化が重要な課題となってきた。この課題に対応すべく、制度改革の面から、入試制度や学区制の見直し、総合学科の設置、６年制中等教育学校の創設、単位制高校の設置などが進められている。しかし、こうした改革が成功しているか否かの成果の評価は、未だ十分ではなく、特に高校教師の改革への努力や貢献を中心においた改革の成果の評価が必要であると考えられる。

本研究の学術的背景としては、アメリカ合衆国や英国の教師に関する教育社会学的研究では、教師のキャリア研究やライフサイクル研究との関連で、教師の指導力の問題が注目されてきた。例えば、P.Sikes、Teachers Careers、1985. J.J.Blase、Socialization As Humanization、Sociology of Education、1986、Vol.59.等が挙げられる。これらはエスノメソドロジーや解釈学的アプローチの導入により、各年齢段階でどのような実践上の問題に出会い、それにどう対処しているか、また職業的な悩みや課題は何かについて参与観察やインタビューを通して指導場面の行動と意識を明らかにしている。近年では、A.Pollard 、 Reflective Teaching in the Primary School、2000.等の子どもへの対処研究がみられる。しかし、学校段階を踏まえた精緻な実証的研究はみられない。

他方、わが国では高校教育に関する研究は徐々に増えているが、高校教師の実践的指導力（資質能力）が高校教育改革を通してどう向上しているかという課題を取り上げた実証的な研究成果はない。そして、高校改革の進行との関連で、改革の成否と関連づけて、教師の対応力の問題を検討しようとするものは見られないのが現状である。

そこで、高校教育の改革の研究成果を一層発展させたい意図から、改革の中で教師が指導力、生徒への教育力をどう向上させているかという点を、解明しようと考えた。

２．研究の目的

近年の高校教育改革の成功に向けて高校教師がどのように取り組んでいるか。とりわけ、改革に積極的に取り組み、一定の教育成果を上げている高校を取り上げ、在籍する高校生の学習と生活を追いながら、改革の成果を生み出す高校教師に関する要因分析を行う。とくに、改革の進む高校に勤務する教師のライフコース(キャリアや年齢段階等)を踏まえ、高校の制度面での改革に対処すべく、高校教師としてどう指導観を変容させ、実践的な指導力の向上にどう取り組んでいるかの分析を進めながら、高校改革の成果を実証的に明らかにすることである。

なお、高校教師の職務遂行の現状を考えると、今一番の課題は高校教育改革の進行の現状であり、高校教育の改革を支える高校教師の指導力に求められるものは大きい。そこで、改革の課題に対応できない高校教師の問題点は何かを実証的に検討した研究が求められているが、現状ではなされていない。

本研究は、こうした点で改革の進む高校教育の種別やタイプに対応できる教師とはどのような特徴の指導力を持った教師なのか、各高校の改革が目ざす生徒の学習や生活の実状に即して、改革の実現化を図る指導力を発揮できる教師の特徴を明らかにすることである。

３．研究の方法

今日、各高校の特色ある改革に対応できる改革対処型の指導力が高校教師に求められているが、従来の高校種別・学力差に対応する高校教師の指導力に関する考え方では不十分である。そこで、今後、高校教師に求められる改革対処型の指導力の構造とその形成過程を明らかにしていく。なお、調査は、高校改革のキー概念と考えられる多様化と個性化という２つの視点から高校の類型化を設定し、これに基づき、公立高校における普通科高校、総合学科、専門学科高校を抽出し、改革への取り組みを明らかにしようとした。その際、実証的データを基礎に置いた分析を進めていくために、高校教員と高校生のナマの声を拾い上げ（インタビュー調査)、それを基にした質問紙調査票を作成し、調査を実施し、データを収集した。

その質問紙調査は、高校生を対象にしたものと、教師を対象にしたものに分類できる。

（１）高校生を対象とした調査

１つは、平成 22 年度に実施した公立高校の総合学科に学ぶ高校生調査である。２つは、平成 23 年度に実施した公立高校の普通科に学ぶ高校生調査である。

（２）高校教師(主に校長)を対象とした調査

１つは、平成 22 年度に実施した公立普通科の高校教師調査。２つは、平成 23 年度に実施した公立専門学科の高校教師調査。３つは、平成 24 年度に実施した公立総合学科の高校教師調査、及び公立高校の普通科目を重視して普通科から発展した小学科を設置する高校の教師調査である。

４．研究成果

わが国の近年の高校教育は多様化の方向で改革が進められている。この多様化には，高校間の入試成績等の量的な面での優劣競争によってもたらされる格差化と，高校間の教育内容の差異化の競争によってもたらされる個性化という２つの側面がある。前者の多様化は，従来から指摘されてきた入学試験等にあらわれる偏差値を尺度とした格差であり，例えば，「有名進学校」とか，「進路多様校」といったラベリングで捉えられてい

る。他方，後者の多様化は教育内容の違いを尺度とした多様化，例えば，普通科，専門学科，総合学科間での違い，専門学科の中での学科の違いなど，主に教育内容の多様化というレベルから捉えることができる。

（1）高校生を対象とした調査結果から

今日の高校生の学習や生活を取り上げる場合には，当然，対象となる高校の教育の実態やその教育上の特色を理解しておく必要がある。個々の高校の教育のあり方は，高校教育の特色化という多様化が進む中，そこで学ぶ高校生の学習や生活に独自な影響を及ぼしていると考えられるからである。

本研究計画では，１つに、近年の高校教育改革で生み出された，高校教育の特色化・個性化の象徴ともなった総合学科高校を取り上げ，そこに学ぶ高校生の学習と生活にみられる特徴を明らかにしようとした。２つに、普通科高校を取り上げた。進学に傾斜する普通科高校の教育は従来必ずしも好意的には評価されてこなかった経緯があるが、高校教育の特色化という文脈で、その教育のあり方が正当化される傾向も生まれている。そこで、進学に傾斜する普通科高校に学ぶ高校生の学習と生活にみられる特徴を明らかにしようとした。

まず、総合学科高校の生徒調査では、平成23年3月の学期末に、1年次と2年次の生徒を対象に実施した。調査対象とした総合学科高校は、大学進学階層では中堅に位置する高校である。有効回答者は、1年次264名（男子97名，女子167名）、2年次273名（男子87名，女子186名）、合計537名（男子184名，女子353名）。男女の比率は全体で男子 34.3%、女子 65.7%。なお、総合学科高校では全国的に女子生徒の比率が高いことが知られている。

結果をみると、１つは，今日の高校生にとって，高校での学習（勉強）はどのように位置づけられているのか。高校生活の中で，学習（勉強）の比重が高くない現状がみられた。２つは，学習（勉強）の結果・成果としての成績（テスト結果）の良し悪しは，何によって決定されているか。努力の多寡によると考えている。３つは，学習（勉強）を促し，促進させる要因と考えられてきた上級学校（特に大学）への進学をどのように意味づけしているか。大学進学が必ずしも学習（勉強）を促す強い要因とはなっていない。４つは，高校での生活態度のあり方が，高校での学習（勉強）や卒業後の生活の送り方にも一定程度影響すると考えている。5つは，高校生が，教室の中で，まじめに学習（勉強）に取り組む意味を，教師との関係のあり方から探った。

進学傾斜型の普通科高校での調査は、平成24年3月の学期末に、1学年と2学年の全生徒を対象に実施した。有効回答は、1学年310名（男子173名、女子137名）、2学年306名（男子145名、女子161名）、合計616名（男子318名、女子298名）。

結果をみると、１つは、進学校の高校生にとって、高校での学習（勉強）はどのように位置づけられているのか。学習行動のレベルでは進学校の生徒の学習時間はかなり多い。しかし、意識のレベルでは、「高校生の時には、勉強を第一に考えて一生懸命に取り組む」ことが高校生活を充実させるという考え方をする高校生は、ほぼ3人に1人の割合であり、進学校の生徒にも、学習が高校生活に占める比重は重要だと捉える生徒が多いとは言えない。２つは、進学高校の生徒の学習についての考え方を因子分析により抽出された4つの因子に着目して、学習内容に対する興味の多寡や好き嫌い、より良い学習の進め方、学習で求められる忍耐力、学習の効率化という4つの点から検討した。これらの点に関する生徒の評価に進学校の生徒の特徴がみられた。３つは、学習（勉強）の結果・成果としての成績（テスト結果）の良し悪しは、何によって決定されているか。努力の多寡（勉強時間）によると考えている。そして、進学校の生徒の特徴は、意識のレベルで努力の重要性を指摘するだけでなく、実際の学習行動のレベル（学校外での学習時間の多さ）でもそれを実行していることである。４つは、学習（勉強）を促し、促進させる要因と考えられてきた上級学校(特に大学) への進学をどのように意味づけしているか。大学進学、つまり学歴の効用観を認める生徒ほど、高校生活に占める学習の重要性を認める傾向がみられた。５つは、高校生が、教室の中で、まじめに学習（勉強）に取り組む意味を、教師との関係のあり方から探った。学力の必要性という功利的な理由の選択が56.2%に達しており、教師への信頼性や専門性に学習に取り組む意味を見いだす生徒は、それぞれ10%強に過ぎない。６つは、学習と学校秩序を形成している行動規範や校則の受容についての考え方との関連性を探った。進学校の生徒にとって学習（成績の向上）と行動規範の形成や受容との関連性が明らかになった。

2つのタイプのことなる高校に在籍する生徒の学習観，すなわち，学習（勉強）する意味の違いを、在学する高校の特色との関連から比較検討することを通して，高校生の学習観や生活観や学校観の問題点や課題を探った。以上が、高校生調査で進めた研究の内容及び結果である。

（2）高校教師を対象とした調査結果から

①普通科高校における教師調査

近年の普通科高校の改革をみると、とくに大学進学にむけての進学準備教育を重視し、

そのための制度改革に、多くのエネルギーを注いでいる。その主な理由は、大学等への進学実績という成果のほかに、妥当だと考えられる高校教育の成果がみあたらないという現実的な問題に関連している。つまり、高校教育の成果を何によって成果と測定・評価するのかという成果のなかみをあらわす指標という点において、他に客観的で具体的なデータとして、多くの国民や高校教育の関係者を納得させるだけの指標が見当たらないということである。進学準備教育の成果が高校教育の成果のすべてであるかのような捉え方が暗黙に了解されるといった構造がとりわけ普通科高校では色濃く続いている。

さらに、21世紀に入る頃からの「学力低下」問題、また、一部の私立高校における過度に進学を重視した教育方針即私学経営といった高校教育観の蔓延などとも呼応して、大学への進学を重視することが高校教育の役割や課題といった見方が強まる傾向がみられる。

本研究では、普通科を取り巻く問題や現状に着目して、大学受験準備教育への関心や圧力が高くなる状況に置かれた、普通科高校の校長が高校教育の経営の責任者として、現状をどのように認識しているかについて、意見や考え等を聴取し、今後の普通科高校教育の方向性を探ること、それを通して普通科高校の教育に求められる高校教員の職務遂行能力、すなわち普通科高校教員に求められる資質能力とはどのようなものであるかという問題を検討するための基礎的データの収集を目的とした。

ところで、大学進学の状況に関しては、2000年代に入り、少子化のもと、私立大学を中心に入試の形態は大きく変わってきた。いわゆる旧来型の一般入試と呼ばれる入学試験に合格して大学等へ進学する者の比率は大幅に低下し、代わって、各種の推薦入試を通して進学する生徒の比率が大幅に上昇している。近年の入学定員と進学希望者の比率を単純にみると、今日の高校生にとって入試圧力は確かに低くなっている。しかし他方で、高校教育の成果として進学実績の向上を求める声が少なくないのも現実である。そこで、主に大学進学との関連から次の３点を取り上げた。１つは、進学との関連で、各校の教員は生徒の現状をどう把握・理解しているのかということ。２つは、進学との関連で、各高校の生徒の特徴と普通科高校の学校経営・運営の課題との対応関係を探ること。３つは、進学との関連を踏まえて、生徒の特徴、および普通科高校の学校経営・運営の課題との関連において、普通科高校の教員に求められる指導力（資質能力）の特徴を探ること。これらの検討を通して、大学進学という課題が、普通科高校の教育にどのような課題を投げかけ、高校教員に何を求めているかを探っていきたい。

調査は郵送法で実施した。調査対象は公立全日制高校の中で普通科を設置している高校の校長である。調査時期は2011（平成23）年2～3月。調査対象校は2,000校である。なお、平成22年度のわが国の公立全日制普通科高校は、2,463校。その内訳は、全日制普通科単独校が1,509校、普通科を有する総合校が619校、定時制を併置した普通科単独校が173校、定時制を併置した普通科を有する総合校が162校。この2,463校から小規模校（学級数が1学年3学級未満）を除く2,000校を抽出して実施した。有効回答数は755名。

大学等への進学に関して、平成22年3月時点での卒業生の進路をみると、大学進学、短大・専門学校進学、就職、大学浪人、その他（就職未定・アルバイト・家事手伝い等）の5つのカテゴリーに区分した。調査回答校の大学への進学率は、平均値が53.6%、中央値が58.1%である。この大学への進学率をみると、進学率の高校間の格差は大きいことがわかる。なお、全体的な特徴を探れば、「大学」と「短大・専門学校」への進学者が約8割、「就職」と「大学浪人」がそれぞれ約1割といった構成になっている。また、普通科高校から国公立大学への合格生徒数をみると、合格者を「100人以上」出している高校は17.9%（135校）であるが、一方で、「0～2人」と少ない高校が27.4%（207校）も占めている。大学進学にみられる高校間の格差は大きい。また、現役に浪人を加えた進学率も算出したが「100人以上」が166校で22.0%を占めている。

なお、大学進学率を分析の視点として検討を進めたが、その際、「大学進学率」という指標として「現役大学進学率＋浪人率」を採用した。それは、「浪人率」の高い高校には、一般的に有名大学や難関大学と呼ばれる大学への進学者が多いことからである。各高校の「現役大学進学率」の指標だけでは高校の進学の実態をより正確に把握できにくいことを見いだした。有名大学や難関大学と呼ばれる大学への進学者には、少子化のなかで受験圧力が低下したといわれるけれども、一定の大学浪人経験者も含まれており、大学偏差値の高い大学には、大学浪人経験者も多いことが明かとなった。こうした点を考慮して、「現役大学進学率＋浪人率」という指標を採用することにした。

この大学進学率という指標を用い、普通科教育のあり方が問われる社会的時代的状況のもとで、普通科高校の現状、そして今後の方向性、普通科高校教師に求められる資質能力を、高校教師への調査データに基づき検討した。まず、普通科高校に学ぶ生徒の特徴をどのように校長はみているかという点から検討を進めた。全体的には、学習面、生活面において、否定的な評価ではなく、肯定的な評価をしていることが明らかとなった。

次に、高校経営・運営における重要な目標や課題について、生徒の学習や生活の指導に関連の深いものを取り上げて検討した。さらに、普通科高校教員に求められる指導力を検討した。そして、大学進学率との関連性で、こうした問題の分析を進めると、次のことが明らかになった。

１つは、進学率という要因が、今日、普通科高校のあり方に大きな影響を及ぼしていることが改めて明らかになった。生徒の特徴についての校長の理解の仕方も進学率に基づく高校階層に大きく影響を受けている。また、この進学率と高校の経営運営における目標や課題とは対応関係にあり、進学率の高低に応じてこうした目標や課題は強く影響を受けている。２つは、しかしながら、校長から教師に求められる指導力は「大学等の受験に関する指導力」を除いては、進学率に基づく高校間階層による違いはみられなかった。つまり、受験指導ともよばれる教師の指導力は進学率の高い高校ではより求められているが、その他の指導力「生徒との関係づくりのなかで発揮する指導力」「生徒の学力や教科内容に応じた指導力」「教育の動向に対応できる指導力」に関しては、どの高校に勤務する教師にも一様に求められる指導力と考えられている。３つは、高校の今後の多様化は不可避ではあるが、制度化による多様化（六年制中等教育学校、総合学科高校、単位制高校、多部制高校、通信制高校等の拡大）の方向もあるが、普通科高校に勤務する校長は普通科の良さを認めるものも多い。このために、新しい制度の高校づくりという視点だけでなく、普通科高校を維持したなかでの改革、進学率（進路状況）に対応した教育内容の改善や生徒のニーズに対応した教育計画の策定も求められるだろう。

②専門学科高校に関する教師調査

公立高校において専門学科を置く高校における教師の教育活動や指導上の重点目標を明らかにし、今、教師に求められていることは何か、とりわけ、今日の高校教育の課題に対応できる、高校教師に求められる指導力とは何かを中心に、明らかにしようとした。各高校の高校生の現状に応じた教育の取り組み、その取り組みに求められる具体的な指導力、今後の高校教育の改善・改革の方向等に関して、専門学科高校1,100校に対する郵送調査を行い、598校からの回答を得ている（有効回答率、54.4%）。現在の時点では、まだ論文化を行えていないが、分析作業は進めている。

③総合学科高校に関する教師調査

総合学科高校における教師の教育活動や指導上の重点目標を明らかにし、今日の総合学科の教師に求められていることは何か、とりわけ、今日の教育の課題に対応できる、高校教師に求められる指導力とは何かを中心に、明らかにしようとした。公立高校と私立高校において総合学科を置く高校340校に対する郵送調査を行い、181校からの回答を得ている（有効回答率、53.2%）。まだ論文化を行えていないが、分析作業は進めている。

調査データで、学科構成をみると「総合学科のみの単科」が82.3%、設置している課程は「全日制課程のみ」が92.3%、「定時制課程のみ」が11校、両課程の併置が１校、その他2校。公私立別では公立高校が93.9%（170校）、私立高校が6.1%（11校）である。

④小学科を設置する高校に関する教師調査

公立高校の中で普通科から発展したともいえる小学科を設置する高校（例えば、理数学科、英語学科、国際学科、音楽科、美術科等）における教師の教育活動や指導上の重点目標を明らかにし、今日の高校教育の課題に対応できる、高校教師に求められる指導力とは何かの問題等を中心に、明らかにしようとした。小学科を設置する高校 365 校に対する郵送調査を行い、148 校からの回答を得ている（有効回答率、40.5%）。まだ論文化を行えていないが、分析作業は進めている。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　４件）

①南本長穂、進学高校における高校生の学習観、『教職教育研究』関西学院大学教職教育研究センター紀要、査読無、第 18 号、2013、11－25

②南本長穂、大学進学率からみた普通科高校－公立普通科高校の校長調査から－、『教職教育研究』関西学院大学教職教育研究センター紀要、査読無、第 17 号、2012、23－36

③南本長穂、高校生の学習観、関西学院大学人文学会編『人文論究』、査読無、第 61 巻第 4 号、2011、51－74

④南本長穂、私立高校の特色ある教育に関する調査研究－高校が考える魅力と経営課題－、『教職教育研究』関西学院大学教職教育研究センター紀要、査読無、第 16 号、2011、27－43

〔学会発表〕（計　４件）

①南本長穂、高校生の学習観と道徳意識、第２回中日徳育対話集会、2012 年 9 月 19 日、中国、北京師範大学

②南本長穂、高校生の学習観(2)－A県の公立学区トップ高の高校生調査から－、日本子ども社会学会　第 19 回大会、2012 年 7 月

1 日、國學院大学
③南本長穂、高校教育改革と普通科ー公立普通科高校長を対象とした調査からー、日本教育社会学会　第 63 回大会、2011 年 9 月 24 日、お茶の水女子大学
④南本長穂、総合学科高校生の学習観と学校観、日本子ども社会学会　第 18 回大会、2011 年 7 月 2 日、明星大学

〔その他〕
①　ホームページ等
http://www.kwansei.info/src/

６．研究組織
(1)研究代表者
南本　長穂　(MINAMIMOTO　OSAO)
関西学院大学・教職教育研究センター・教授
研究者番号：６０１０８３７１